

異界との境界 武蔵境

文人の
武蔵野

村上春樹 ⑤

村上春樹の小説「武蔵境のありくい」は、女性主人公である夏帆の語りで進行します。「危険が迫っている」夏帆に近づく影響を与える存在が「ありくい」です。夏帆の不安に乗じて武蔵

「境に招き寄せたありくいの奥さんは、夏帆が居を移すと今度は怪しい頼み事をするようにします。」

当初、夏帆にとってのありくいは、一匹の雌ありくいでした。しかし、実は彼女は結婚して夫のいる「ありくいの奥さん」であり、故郷のブラジルにはふたりの子どももいたという家族の事情を聞くことになりました。

武蔵境の新居の床下に住み、夫婦で夏帆を守ってくりくいの奥さんに「そこは



武蔵境駅前の商店街。小説では架空の商店「ときや」が登場する（武蔵野市で）

かとなない個人的好意」を抱くようになっていきます。こうして、元氣のない夫のためにブラジル産のシロアリのオイル漬けを入手してほしいというありくいの奥さんの願いを聞き入れることになるのですが、それは日本では禁制品でした。法に触れる行為を教唆されたのです。

夫は、夏帆に「さあ、ためらうことなく殺すのです」と囁（ささ）きます。

（敬称略）
（武蔵野大教授、むさしの野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお試しください。
スマートフォンはQRコードから。